

インドネシア語会話における指示詞 *gitu* の談話的機能

ー引用標識としての機能に基づく「説得」と「和らげ」ー

藤崎拓海（大阪大学大学院生）

1. はじめに

インドネシア語の口語的な会話には、*gitu* という語が非常に頻繁に現れる。これは「そのような」という意味を表す指示詞 *begitu* の短縮形である。*begitu* は文法書の記述によると、代名詞として述語を構成する (Alwi et al. 2003) か、様態の副詞として述語を修飾する (Sneddon et al. 2010) のが基本的な用法である。こうした用法は、*gitu* にも同様に見受けられる。下の事例(1)と事例(2)は筆者のデータ（第2章で詳述）からの抜粋であり、それぞれ *gitu* が単独で述語を構成する例（事例(1)）、述語を修飾する例（事例(2)）である。

- (1) Maksud gue *gitu*.
 意図 1SG そのような
 [主語] 述語
 俺が言っているのはそういうこと。[SPRD 05:47]
- (2) Gue bilang *gitu*.
 1SG 言う そのような
 主語 [述語]
 私はそのように言った。[SBRG 04:44]

一方、*gitu* はそれら基本的な用法に加え、文の義務的構成要素である主語と述語の外に特に頻繁に現れる。下の事例(3)で、*gitu* は直前の述語 *masih nggak ngerti* 「まだわからない」を修飾しているのではなく、文の構成要素の外に現れているとみることができる。このような場合、*gitu* は直前に述べられた内容を指し示している。筆者の収集したデータにおける *gitu* の出現回数全体の約7割がこの用法で現れる。

- (3) Gue juga masih nggak ngerti *gitu*.
 1SG ~もまた まだ 否定詞 理解する そのような
 [主語] [述語]
 俺にもまだわからない（ということ）。[KTRH 09:28]

この短縮形に特有の用法について、口語インドネシア語に特徴的な要素を記述した Ewing (2005: 249-250) 及び Sneddon (2006: 132) は、*gitu* が主にイントネーション・ユニット¹の末に現れ、ユニットの区切りを示すと述べている。特に Sneddon は、*gitu* が直前の発話に対する「強調 (strength)」を表す談話的な小辞 (particle) のように機能していると述べている。しかし、*gitu* がどのような意味の「強調」なのか、またどのようなメカニズムで発話を「強調」するのかについては明らかにされていない。そこで、それら2つの問いを明らかにすることを本発表の目的とする。

2. 対象とする会話データと分析方法

分析に用いるデータは、友人同士2人ペアによる対面自由会話9ケース（約106分）である。会話は、2017年から2019年にかけて大阪及びインドネシアの首都ジャカルタで収集した。参加者は、インドネシア語を第一言語とする大学(院)生合計17名である。会話は音声の録音に加えて、音声に現れない聞き手の反応などを確認するために録画も行った。また、会話の自然さをできる限り担保するために、筆者は部屋の外あるいは会話参加者の視界に入らない場所で待機した。音声データは、ポーズや言い淀みなどの情報を含めて詳細に文字化した。本稿に掲載する事例において用いられる記号は、4ページ目にまとめている。

以上のように収集したデータをもとに、*gitu* が指し示す直前の内容や前後のやりとり、*gitu* と共起する要素などに注目して分析を行った。特に本発表では、上で挙げた例(3)のように発話の末に現れる *gitu* が引用標識としての機能を持つことに着目して、先の問いを明らかにすることを試みる。

¹ Intonation unit. 単一のイントネーション曲線で発話されるまとまり。

3. *gitu* の引用標識としての特徴

そこでまず、今述べた *gitu* の引用標識としての特徴について本章で詳しく論じておく。

gitu は、自己や他者の過去の発言や心情を表す発話の末に現れた場合、引用標識として機能する。Ginanjjar (2016) は、インドネシア語の自然会話における引用の特徴を述べる中で、「バーバル引用マーカー」つまり語句の形で現れる引用標識の中では *gitu* が最も多く現れることを指摘している。

筆者のデータにおいて、引用標識として現れる *gitu* は例えば下の例(4)に見られる。この発話は、交際中であることを周囲に隠している共通の友人カップル、つまりその場にいない第三者について参加者同士が意見を述べ合う中でなされたものである。発話末に引用標識 *gitu* があることで、直前の *lebih open aja* 「もっとオープンにやれ」が、その場にいる聞き手に向けた発話ではなく、話題となっている第三者に対する“心の声”を引用したものとして伝達される。

- (4) 交際中であることを周囲に隠している友人のカップル（その場にいない第三者）について D と N が意見を述べ合う中で。 [DNND 05:04]

N : “*Lebih open aja,*” *gitu* loh.
より オープン だけ そのような particle
「もっとオープンにやれ」 っのよ.

この例のように、*gitu* は、他者（客体化した自己を含む）の声を取り入れる文脈において頻繁に現れる。Goffman (1981)² の言葉を借りて言えば、話し手は *gitu* を発話末に置くことによって、声に出して発話を伝達する役割のみを担う animator 「発声者」として自分自身を配役し、それを通して、今その場にいる自分が創り出したのではない発話を伝達していることを示しているのである。

また、*gitu* 以外のインドネシア語の引用標識は *bilang* 「言う」、*pikir* 「思う」などの動詞である。それら動詞の引用標識を用いる場合はもちろん「言う」「思う」などの行為が明示されることになるし、原則として元話者も示される。例えば下の例(5)では、引用発話の前にある動詞 *bilang* 「言う」で行為が、そして元話者が 1 人称代名詞の *gue* で明示されている。

- (5) A: *Habis itu gue bilang,* “*Mau nggak temenin gue ke Umeda?*”
尽きる それ 1SG 言う ~したい 否定詞 付き添う 1SG へ 地名
その後俺は言った。「梅田まで一緒に来てくれないか。」 [JFAR 02:23]

これに対して、先の事例(4)のように *gitu* だけが引用標識として現れる場合は、元話者が誰なのか、さらには「言った」のか、「思った」のかなどの行為も明示することなく引用発話を提示することができる点が特徴である。

4. *gitu* の談話的機能

発話末に現れる *gitu* の中には、第 3 章で述べたような引用標識としての機能及び特徴に基づいた談話的機能を持っていると考えられるものがある。それらを詳細に分析した結果、「説得」機能及び「和らげ」機能が考察された。それぞ以下 4.1 節及び 4.2 節において、具体的な事例を挙げながら説明する。

4.1 説得

筆者のデータでは、*gitu* が、先行する文脈の内容を別の形で言い換えた発話や、先行する文脈から論理的に導かれる帰結を表す発話の末に現れ、さらに *gitu* が現れた直後にはその情報を受容したことを明示する聞き手の反応が続くという事例が散見された。そのような場合、*gitu* は後述するようなメカニズムによって発話を説得的に伝達する機能を持っていると考えられる。このことについて、下の事例(6)で確認しよう。

- (6) ジャカルタにごみが散らかる原因を考えるやりとり。 [LFAD 08:16]

01 L: *Mungkin, apa, mereka lebih aware nggak sih, kalo di daerah?*
多分 何 3PL より 自覚的な 否定詞 particle ~なら で 地方
多分、何、彼ら（地方からジャカルタに移住した人々）はもっと自覚的じゃない？地方だったら？
02 *Apa karena di Jakarta tuh imigran?*
疑問 ~だから で 地名 particle 移民
ジャカルタは移民だからか？

² Goffman (1981) は、「話し手」と言われる中には言葉を選択し発話の表現を創作する「作者 (author)」、実際に声を出して伝達する「発声者 (animator)」、発せられた言葉に対する責任を担う「本人 (principal)」の役割の区別があるとした。

- | | | | | | | | | |
|-------|---------------------------|----------|--------|----------|----------|-----------|---------|----------|
| 03 | Maksudnya | mereka, | mereka | kan | datang | dari | luar | kan? |
| | つまり | 3PL | 3PL | particle | 来る | から | 外 | particle |
| | つまり彼ら、彼らは外から来てるじゃん？ | | | | | | | |
| 04 D: | He'eh | [He'ch.] | | | | | | |
| | うん、うん. | | | | | | | |
| 05 L: | | [Orang] | luar | semua | kan | yang | datang? | |
| | | 人 | 外 | 全て | particle | 関係詞 | 来る | |
| | 全部外の人たちじゃん（ジャカルタに）来てるのは？ | | | | | | | |
| 06 | ⇒ Jadi, | mereka | nggak | ada | rasa | memiliki, | gitu | loh. |
| | だから | 3PL | 否定詞 | ある | 感覚 | 所有する | そのような | particle |
| | だから、彼らには所有している感覚がないってわけよ. | | | | | | | |
| 07 D: | He:::m, | mungkin | | ya. | | | | |
| | | 可能性がある | | particle | | | | |
| | うへん、かもね. | | | | | | | |

上の事例では 06 行目に *gitu* が現れているが、*gitu* の直前部分 *mereka nggak ada rasa memiliki* 「彼ら（ジャカルタの住民）には所有している感覚がない」は、接続詞 *jadi* 「だから」で導入されていることからわかるように、さらに先行する 05 行目までの内容から導かれる論理的な帰結を述べようとしたものである。この事例における話し手 L の主張は、「ジャカルタの住民は外の地域からの移住者ばかりである (03, 05 行目)」⇒「彼らはジャカルタが自分のものであるという感覚がない (06 行目)」という論理の流れを持っている。そしてその帰結を表す発話の末に *gitu* が現れているのである。

このように、先行する文脈から論理的に導かれる帰結に現れる *gitu* は、*gitu* が引用標識であることと関連付けてその機能を考えることが可能である。すなわち、引用標識である *gitu* を発話末に置くことで話し手は自身を animator (Goffman, 1981) として配役し、その発話の出どころが自分ではないことを示す。さらに、元話者を特定しないという *gitu* の特徴によって、直前に述べられた内容がただ単に話し手による主観的な考えや主張を表すものではなく、あたかも「誰もがそのように言う／思う」当然のことであるかのような印象をもたらし、説得の効果を高めていると考えられるのである。

以上のように本節では、Sneddon (2006) が言う「強調」が、「説得」すなわち、*gitu* が持つ引用標識としての特徴に基づいて発話に客観性をもたらし、聞き手の理解を促すという意味での「強調」であることを提案する。

4.2 和らげ

前節では、Sneddon (2006) がいう「強調」が、*gitu* が引用標識として持つ特徴に基づく「説得」であることを論じた。一方本節では、いわゆる「強調」や「断言」というよりはむしろ、*gitu* があることによってその発話がもつ直接的な印象が和らいでいる事例について論じる。それは具体的には、*gitu* が聞き手への非難あるいは否定的な意見を表す発話の末に現れる場合である。1 例として下の事例(7)が挙げられる。

(7) 同期の R が自分よりも先に卒業してしまうことを, S が嘆いている. [SBRG 01:33]

- | | | | | | | | | |
|----------|---------------------------|--------|---------|-------|----------|---------|--------|--------|
| 01 S : | Istilahnya | lu, | lu | udah, | | | | |
| | いわば | 2SG | 2SG | すでに | | | | |
| | いわばあんたはもう, | | | | | | | |
| 02 | Lu | udah | ngulang | tiga | kali, | [gue | dua | kali.] |
| | 2SG | すでに | 繰り返す | 3 | 回 | 1SG | 2 | 回 |
| | あんたは3回(試験を)やり直しになって、私は2回. | | | | | | | |
| 03 R : | | | | | | [| ((笑い)) |] |
| 04 S : ⇒ | Tapi | kenapa | lu | lulus | duluan, | gitu. = | | |
| | しかし | なぜ | 2SG | 卒業する | 先に | そのような | | |
| | なのに何であんたが先に卒業するのっていう. | | | | | | | |
| 05 | =¥Lu | jahat. | Lu | nggak | nungguin | gue.¥ | | |
| | 2SG | ひどい | 2SG | 否定 | 待つ | 1SG | | |
| | あんたひどい. あんた私を待ってくれなかった. | | | | | | | |

03 R :

04 S :

05

上の事例において話し手 S は、自分より聞き手 R の方が卒業試験を不合格になった回数が多いことを指摘した上で (01-02 行目)、にもかかわらず先に卒業してしまう R のことを 04 行目で非難している。この 04 行目の *gitu* の直前部分 *kenapa lu lulus duluan* 「何であんたが先に卒業するの」は、聞き手 R を指す 2 人称代名詞 *lu* の使用や、理由を尋ねる疑問文の形式をとっていることから詰問のようにも聞かれかねないものである。しかし、発話末に *gitu* が置かれていることによって、そうした印象が和らいでいるように感じられる。

このような効果が生じるメカニズムも、*gitu* が引用標識であることと関連付けて考えることが可能である。すなわち、元話者を特定しないという特徴を帯びた引用標識 *gitu* を発話の末に置くことで、話し手は出どころのわからない発話を単に伝達する *animator* (Goffman, 1981) として振る舞う。それによって、その発話が話し手によって創作されたものではないかのように表され、さらにそれが誰に向けられたものなのかも不明になるため、結果として非難が和らぐと説明できる。

したがって本節では、*gitu* が聞き手に対する非難や否定的な意見を表す発話の末に置かれた場合、引用標識としての特徴に基づき発話の創作者と受け手をあいまいにすることによる「和らげ」機能を持つことを提案する。

5. 結論

以上のように、*gitu* の引用標識としての機能及び特徴に着目したことによって、今まで単に「強調」(Sneddon, 2006) とされていた *gitu* の機能が、他者の声を借りて客観性をもたらすというメカニズムによる「説得」であるとわかった。さらに、*gitu* が聞き手に対する非難や意見を述べる発話の末に現れる場合は、必ずしも「強調」や「断言」ではなく、むしろ、それら行為を和らげる機能を持っていることが新たに明らかになった。これらは一見矛盾するようにも見えるが、実は表裏一体の機能である。すなわち、話し手が *gitu* によって自分自身を *animator* (Goffman, 1981) として位置づけ、発話の出どころを不特定にすることが、主張という局面では客観性をもたらして説得の効果を高める一方、聞き手に対する非難や否定的な意見を述べるという局面ではそれらが直接的すぎるのを調節するという作用をもたらすのである。

事例中で用いられる記号

[]	発話の重なり。	言-	不完全な状態で途切れた発話。
(0.3)	ポーズの秒数。	言葉::	直前の音が引き延ばされていることを表す。
=	2 つの発話が途切れなく密着していることを表す。	¥言葉¥	¥¥で囲まれた部分が、にやにやしながらあるいは笑い声で発話されていることを表す。

参考文献

- Alwi, Hasan., Dardjowodjojo, Soenjono., Lapoliwa, Hans and Moeliono, Anton M. (2003). *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia* (『インドネシア語標準文法』) 第 3 版. Balai Pustaka.
- Ewing, C. Michael. (2005). Colloquial Indonesian. In Adelaar and N. Himmelmann. (ed.) *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, pp.227-258
- Ginanjari, Pika Yestia. (2016). 自然会話における引用発話の形式：日本語とインドネシア語の対照研究 大阪大学博士論文 (未公開)
- Goffman, Erving. (1981). Footing. *Forms of Talk*, pp.124-159
- Sneddon, J., Adelaar, A., Djenar, D. N., Ewing, M. C. (2010). *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. Routledge.
- Sneddon, James. (2006). *Colloquial Jakartan Indonesian*. Pacific Linguistics.